館蔵品図録

戦国合戦図屏風

岐阜市歴史博物館

あいさつ

斎藤道三や織田信長が居城とした岐阜城（井口城）の麓に位置する岐阜市歴史博物館は、常設展示で戦国時代をひとつの柱にすえ、資料収集においても、戦国時代の戦いを描いた屏風・絵巻・錦絵等を収集してきました。それらの作品は必ずしも戦国合戦のありさまをリアルに伝えたものではありませんが、それぞれの作品が描かれた時代に、戦国時代の戦いが歴史としてどのように考えられ、伝えられようとしてきたのか、歴史ロマンとしてどのように楽しまれてきたのかを探るうえで興味深い作品であることは事実です。

今回紹介する作品は特別展示や常設展示でたびたび陳列してきましたし、展覧会図録で掲載したことのある作品です。しかし、今までは漠然と歴史事象としての合戦を示す資料として用いただけでした。そこで、今回はできるだけディテールを紹介し、そこに描かれている画題を解説するとともに、そこから発展して絵画資料からなにが導きだせるかを考えながら編集することにしました。この図録を通じて、戦国時代に想いをはせるだけではなく、戦国合戦図屏風の新たな魅力を見出していただければ幸いです。

平成二十年三月

岐阜市歴史博物館

あいさつ・目次・凡例

あいさつ・目次・凡例　1
賤ヶ岳合戦図屏風　2
大坂夏の陣図屏風　20
関ヶ原合戦図屏風　32
関ヶ原合戦図絵巻（紙本淡彩）　44
岐阜市歴史博物館本　賤ヶ岳合戦図屏風について　土山公仁　49
作品解説　53
奥付　56

凡例

一　当図録は岐阜市歴史博物館が所蔵している戦国合戦図屏風と紙本淡彩関ヶ原合戦図絵巻の全容を紹介するものである。

一　当館はこの他に絹本著色関ヶ原合戦図絵巻を所蔵しているが、それについては飯田真（当時　岐阜市歴史博物館学芸員）が『研究紀要4』一九九〇で紹介し、全場面を掲載した『復刻　関ヶ原合戦図絵巻』郷土出版社二〇〇〇がすでに公刊されているので、今回は掲載しなかった。

一　編集執筆は土山公仁が担当した。

初期戦国合戦図屏風

～歴史を伝える試み～

合戦についての直接的な記憶が残っている時期に制作された可能性のあるものを初期戦国合戦図屏風とよびたい。『津軽家本関ヶ原合戦図屏風』（大阪歴史博物館蔵）・『黒田家本大坂夏の陣図屏風』（大阪城天守閣蔵）がその双璧である。それぞれ徳川家・黒田家が直接制作に関与したと考えられており、それぞれの家にとって記念碑となった合戦を当事者の記憶がなまなましい時代に描かせたと考えられている。『長篠合戦図屏風』（名古屋市博物館本）の制作経緯は不明であるが、比較的早い時期の成立である。

初期戦国合戦図屏風は歴史事象としての戦いを絵画化して伝えることが目的であり、そのディテールも風俗図として充分研究の対象になりえる。

『岐阜市歴史博物館本　賤ヶ岳合戦図屏風』も、初期合戦図屏風の中に加えてよい作品だ。論証は本図録に掲載した「岐阜市歴史博物館本　賤ヶ岳合戦図屏風について」に譲るが、単なる文学作品の再構成でなく、なんらかの意図で歴史を伝えるべく制作された作品であることは確かである。

▲1−2　賤ヶ岳合戦図屏風　（左隻）

▲1−1　賤ヶ岳合戦図屏風　（右隻）

賤ヶ岳の戦い

天正十一年（一五八三）、羽柴秀吉が、近江国伊香郡の賤ヶ岳附近で柴田勝家をやぶり、本能寺の変後の政治的方向性を決定づけた戦いである。

本能寺の変後、清須会議で織田信長の後継者を三法師（秀信）とすることが決定したものの、主導権をめぐって信長家臣団は実質的に崩壊し、三月になると越前の柴田勝家が近江に出兵した。それに対抗し、秀吉も近江木ノ本に着陣し、双方にらみ合いが続いた。四月に入って岐阜城の織田信孝が再挙兵すると、秀吉は主力を美濃へ転じた。守備が薄くなったのを見計らい、勝家が佐久間盛政に中川清秀の守る大岩山砦・高山右近の岩崎山砦への攻撃を命じたのは四月十九日である。二十日、盛政は大岩山砦・岩崎山砦を占拠し、勝家の命に反して撤退を拒否した。一方、柴田方の動きを知った秀吉は大垣城から直ちに軍を返し、五二kmをわずか七時間で駆け抜けた。秀吉の大軍に驚いた佐久間盛政は同深夜に撤退を開始したが、翌朝未明、秀吉の大軍に強襲されてしまう。この時、活躍した秀吉子飼いの武将たちが賤ヶ岳七本槍と呼ばれている。

賤ヶ岳砦

四月二十日、賤ヶ岳砦には桑山重晴が布陣していたが、柴田方の大岩山砦・岩崎山砦への急襲を知り、一時退城した。その後丹羽長秀が琵琶湖から上陸入城し、重晴に帰城をうながしている。

二十日、午後二時頃、柴田方の動きを知った秀吉は大垣から反転を開始し、その夜のうちに賤ヶ岳に着陣した。佐久間盛政は月明かりをたよりに大岩山からの撤退を開始する。その動きを待って、秀吉は総攻撃を命じたのである。

▼1−5　攻撃に転じる羽柴方（右隻2〜3扇）

▼1−3　賤ヶ岳砦(右隻1～2扇)

▲1−4　賤ヶ岳砦部分(右隻1～2扇)

賤ヶ岳七本槍の活躍

この戦いのハイライトともいうべき七本槍のシーンである。四月二日、佐久間盛政の弟で勝家の養子になっていた柴田勝安は賤ヶ岳から峰続きの堀切を南に向かって陣し、佐久間盛政の撤退を助けた。続いて勝安が撤兵する段になり、秀吉は小姓たちに追撃に加わることを命じた。この時、活躍した秀吉の小姓たちが後に賤ヶ岳七本槍とよばれることになる。なお、七本槍の顔ぶれは諸本によって微妙に異っている。

貼札を信用すれば、ここで描かれている秀吉方の七本槍は加藤清正、加藤嘉明、福島正則、脇坂安治、糟野武則、平野長泰、片桐且元で、対する柴田方は　拝郷五左衛門・浅井吉兵衛・山路将監・宿屋七左衛門・安彦弥五右衛門・小原新七・水野助三である。この構成は小瀬甫庵『太閤記』の記述と一致している。

▼1−8　撤退する柴田勢の殿（右隻三扇）

▼1−7　追撃する秀吉勢（右隻一扇）

▲1−6　琵琶湖畔を撤退する柴田勢の殿（しんがり）と追撃する秀吉勢　（右隻一〜二扇）

▲1−9 「賤ヶ岳七本槍の活躍（右隻三〜四扇）

▲1−10　柴田勝安本陣（右隻五扇）

◀1−11　柴田勝安の陣営（右隻四〜五扇）

柴田勝安の陣

堀切を越えて追撃する秀吉勢と対峙する丘の上に、白の陣羽織を羽織り金の軍配団扇を持って床几に坐しているのが柴田勝安である。右扇に描かれた特定可能な人物像としては、もっとも印象的な位置に描かれている。勝安は当時越前勝山城主、武勇に優れ勝家から重用されていたが、賤ヶ岳合戦の混戦の中で討ち死してしまった。

なお、『甫庵太閤記』などはこの人物を柴田三左衛門尉と記すだけである。実名は勝政と考えられてきたが、近年の研究で勝政と勝安は別人であることが明らかになった。（『勝山市史二』勝山市二〇〇六）

▲1−12　琵琶湖を敗走する柴田勢　（右隻四〜五扇）

岩崎山砦の攻防

琵琶湖側から賤ヶ岳方面を望むと、向かって右から賤ヶ岳、大岩山、岩崎山の順に展望することができるが、この屏風では、中央に岩崎山、左端に大岩山が描かれている。岩崎山砦はキリシタン大名として著名な高山右近が守備していた。甫庵『太閤記』には、岩崎山砦の攻防については詳述されていない。竹中重門の『豊鑑』によれば、柴田勢にかなわないとみて羽柴秀長陣へ撤退したという。

▼1−13　岩崎山砦の攻防（右隻三〜五扇）

▲1−14　撤兵する高山勢と追撃する柴田勢（右隻四〜五扇）

大岩山砦を攻める柴田勢

賤ヶ岳合戦、前半のハイライトは摂津茨城城主中川清秀の守る大岩山砦を柴田勢が攻め落し、清秀を討ち取ったことだろう。

四月二十日早朝、佐久間盛政の率いる柴田勢は、不破彦三、徳山五兵衛、佐久間久衛門を先陣として、余呉湖側へまわりこみ、秀吉方の守る大岩山砦・岩崎山砦を急襲した。図左端、三引両赤の吹流のすぐ右で金の軍配団扇と采配をもつ人物が佐久間盛政である。砦を右側から攻める日の丸の旗印は徳山勢、日の丸扇の馬印の近くに五兵衛がいるはずであるが当人は描かれていないようである。

▲1−15　大岩山砦の攻防（右隻四〜五扇）

▲1−16　秀吉方の砦の間を敗走する柴田勢（左隻一〜二扇）

敗走する柴田勢

柴田勝安の討死によって壊滅した勝安勢は、秀吉方の木村隼人佐の守る神明山と堀秀政の守る東野山砦の間を敗走していく。琵琶湖岸を敗走するのは佐久間盛政の軍勢である。その後方に佐久間久右衛門や原彦次郎の名が貼札にあるが特定できない。

▲1−17　敗走する佐久間盛政（左隻二〜三扇）

▲1−18　敗走する柴田勢（左隻一〜二扇）

▲1−19　茂山に陣する前田勢（左隻第三扇）

▲1−20　林谷山砦(左隻六扇)

茂山に陣する前田勢

鍾馗に金軍配団扇の馬印、その周辺には梅鉢文の旗がなびき、茂山に陣した前田利家の陣であることがわかるが、利家は描かれていない。利家が二千余の軍勢を二段に備えたという記述は、甫庵『太閤記』による。

体勢を整えた佐久間盛政が秀吉方と激戦をくりひろげている最中、前田勢は突然退却をはじめ、柴田方総崩れの直接的原因を作った。『川角太閤記』では、秀吉と利家の間で、利家が直接戦闘に加わらないという密約があったという。

利家と勝家の関係は、天正三年(一五七五)勝家が信長から越前の支配を委ねられた際、不破光治・佐々成政とともに柴田目付とされたことにはじまり、直接的な主従関係はない。敗北して北ノ庄城へ逃れる途中、勝家は越前・府中城の利家のもとに立ち寄り、労をねぎらっている。

毛受勝助の討死

賤ヶ岳合戦のフィナーレは毛受勝助の戦死である。佐久間勢の総崩れをうけて、七千余騎の勝家本陣にも動揺が走り、半数以上が逃亡してしまう。その状況の中で勝家は最期の戦いを挑もうとしたが、それを押しとどめたのが毛受勝助であった。勝助は勝家に名も知れぬ者の手にかかるのではなく、北庄で心静かに自害することをすすめ、金の御幣の馬印を受け取った。勝助は原彦次郎が在陣していた林谷山の空砦（1－20）に入り態勢をととのえ、秀吉勢を迎撃し、勝家が逃走する時間をかせいだ後、兄茂左衛門とともに羽柴勢に突入し討死した。

1−21　羽柴勢と戦う毛受勝介勢　（左隻三〜五扇）

▼1−22　毛受勝助の陣　（左隻五扇）

中期戦国合戦図屏風

～文学による歴史の再構成～

十七世紀の中～後葉に制作された戦国合戦図屏風を前期戦国合戦図屏風とよびたい。『長篠合戦図屏風』（成瀬家本）『小牧・長久手合戦図屏風』（成瀬家本）、『川中島合戦図屏風』（和歌山県立博物館蔵）などを代表としてあげておこう。対象となる合戦についての直接的な追憶はすでになく、それぞれの家のアイデンティティ確立や軍学研究のため、『家伝』や『軍記物』の記述を単純に再構成しただけでなく、新たに諸史料を調査したり、軍学上の知見を加えて、絵画化したものである。

その流れの延長上に十八世紀から十九世紀にかけて制作された作品を中期戦国合戦図屏風とよびたい。『岐阜市歴史博物館本　大坂夏の陣図屏風』もそのひとつで、『軍記物』や『家伝』を取捨選択しその内容を絵画化しようとしている。需要層も単純に武家階級とばかりはいえないだろう。

大坂夏の陣

慶長二十年(一六一五)、徳川家康が豊臣氏を滅ぼした戦いである。その前年に勃発した大坂冬の陣では、大坂城の外堀を埋めるという条件で和議が成立した。翌年、家康は豊臣氏に対し移封と浪人の解雇を要求。豊臣氏はこれを拒否したため、夏の陣が勃発した。豊臣方は堀を失った大坂城に籠城することもできず、大和・紀州方面へも戦火は飛び火している。その過程で、大坂方の有力武将たちは次々と討死していく(四月二九日塙直之、五月六日後藤又兵衛・木村重成)。最終決戦は五月七日である。豊臣方の真田幸村・毛利勝永などの奮闘により、徳川方の大名にも死傷者がでたり、家康本陣も一時大混乱に陥ったが、幸村らも討ち死し、大坂城は落城した。翌日豊臣秀頼と母淀殿も自害し、豊臣氏は滅びたのである。

▲2−1　大坂夏の陣図屏風(右隻)

▲2−2　大坂夏の陣図屏風(左隻)

真田幸村の活躍

真田幸村の実名は信繁であるが、『軍記物』で使われている幸村の方が広く知られているだろう。関ヶ原合戦後、幸村は高野山で蟄居生活を送っていたが、大坂方に請われて入城し、冬の陣・夏の陣で大活躍した。その奮闘ぶりは、「真田日本一の兵、古よりの物語にもこれなき由」（薩藩旧記）などと、徳川方からも絶賛された。『難波軍記』など『軍記物』でも大きく取り上げられ、講談のヒーローとして語りつがれた。

五月七日、天王寺口の茶臼山に布陣した幸村は、家康に最期の戦いを挑んだ。一時は家康本陣をおびやかしたが、ついに戦死してしまう。真田勢と相対したのが松平忠直の率いる越前勢である。前日、道明寺の戦いで援兵をださなかったことを家康から叱責された忠直は最終的に真田勢を打ち破り、大坂城一番乗りもはたした。

赤備、六文銭の旗印が真田勢のシンボルで、鹿角の兜は幸村の指標である。

▲2−3　松平忠直勢（右隻二扇）

▲2−4　激突する真田勢と松平忠直勢（右隻三〜四隻）

▲2−5　真田幸村勢（右隻四〜五隻）

道明寺の戦い

五月六日、大和路から大坂城に向かう徳川方を豊臣方が迎撃した戦いである。真田幸村が霧の発生により行軍に手間取っている間、後藤又兵衛基次は単独で小松山に進出し、伊達政宗・水野勝成ら二万以上の軍勢の集中攻撃を受け、壊滅してしまった。

後藤基次はもと黒田家に仕え、関ヶ原合戦では合渡の戦い・本戦で活躍したが、後に長政と対立して、出奔。大坂の陣を題材とする『軍記物』では、幸村とならぶ豊臣方のヒーローとなった。

なお、『難波戦記』はこの日の基次の出で立ちを「總白の旗、黒半月の馬印を先に進め、黒糸威の鎧、同じ毛の頭形の兜に獅噛の前立物打立てたるを猪頸に着」と記し、この作品の図像と全く一致しない。しかし、『山口休庵咄』は、基次の旗を白黒段々と記しており、多様な軍記物・家伝をもとにして絵画化されたことがうかがえるだろう。

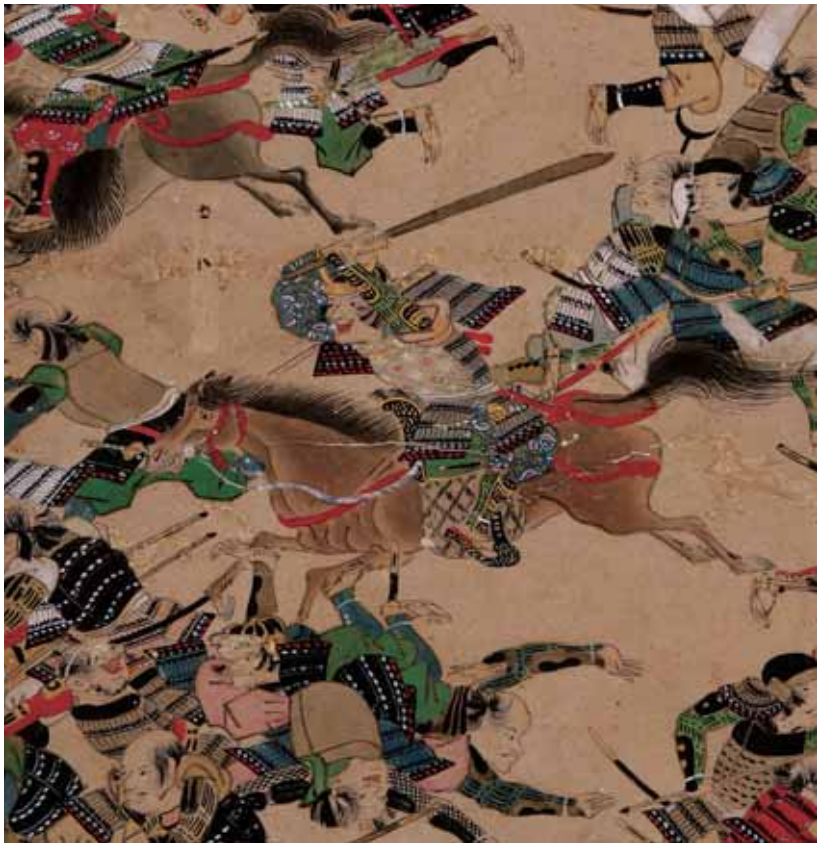
▲2−6　徳川方に囲まれる後藤勢（右隻二〜四扇）

▲2—7　後藤基次陣（右隻三扇）

▲2−8　後藤勢を囲む徳川方（右隻一〜二隻）

▲2−9　水野勝成（右隻一〜二隻）

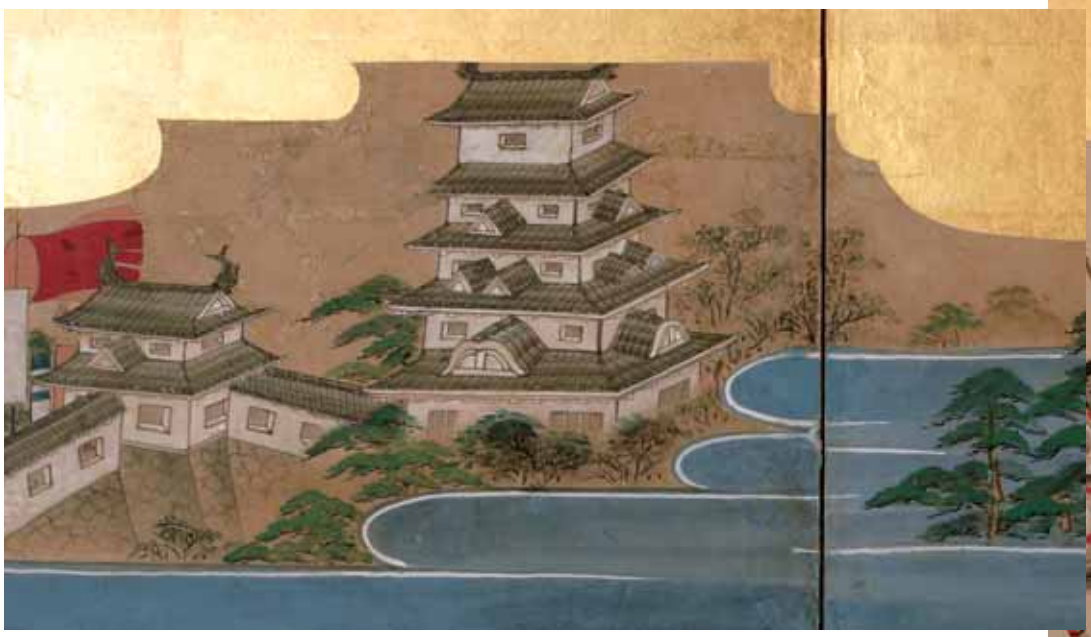
▲2−10　伊達政宗・松平忠明に率いられる徳川方（右隻三〜四隻）



▲2−11　本多忠朝（左隻二扇）

天王寺口の戦い

五月七日、徳川方は大坂城総攻撃にあたり、軍勢を二手にわけた。家康が向かったのが主戦場である天王寺口で、秀忠が岡山口から攻めることになった。天王寺口の先鋒は本多忠勝の子で上総国大多喜城主忠朝であった。忠朝は冬の陣の際、家康から叱責をうけ、討死を遂げる覚悟で大坂夏の陣に臨み、豊臣方の毛利勝永勢と激突した。この日、毛利勝永勢の奮闘ぶりも際立っており、本多忠朝のほか、信濃松本藩主小笠原秀政父子を討ち取っている。



▲2−14　大坂城天守(左隻五〜六扇)

▲2−12　毛利勝永 (左隻三〜四扇)

▲2−13　激突する両軍(左隻二〜三扇)

岡山口の戦い

岡山口へむかった徳川方の先鋒は加賀金沢藩主前田利常であった。対する豊臣方は大野治長の弟、治房・治胤兄弟が布陣し、治房が鉈紋の旗、治胤が赤い吹貫を押し立てていた(『難波戦記』)。利常・治胤に相当する人物は描かれていないが、場内に逃げ込んだ武将のひとりは治房と思われる。

城外に描かれた大きな炸裂は、敗走する大野治房を追って加賀勢が城門から城内になだれこもうとした際、城兵が鉄砲の薬筒に火をつけ、門外に投げ出し、爆発がおこったという『難波戦記』の記述を絵画化したものである。

▲2−15　岡山口から城内へ攻め込もうとする徳川方(左隻三〜四扇)

▲2−16　城内に敗走する豊臣方（左隻四〜六扇）

▲2−17　大野治房（左隻六扇）

後期戦国合戦図屏風

～識るから楽しむへ～

前中期の戦国合戦図屏風を文学の絵画化というスキームで定義すると、後期合戦図屏風の特質は文学作品をイメージの源泉にすえるものの、絵師はそれにとらわれず自由な発想で場面を構成したこととといえるだろう。

『岐阜市歴史博物館本　関ヶ原合戦図屏風』は、関ヶ原合戦という歴史事象を対象としながら、絵師は配陣図にこだわらず、自由な位置に登場人物をおき、一般的な『軍記物』に登場しない人物までも描きこんでみせている。

『軍記物』から『講談』が成立してくるように、新たな戦国合戦図屏風の世界が開拓されたのである。戦国時代の人物たちがさかんに登場するようになる錦絵の世界とも共時性をもつ動きで、従来の戦国合戦図屏風を需要した武士たちとは明らかに異なる階層がそれを支えたのである。TVのドラマ、映画、アニメ、ゲームなどを媒体にして、現代人は、歴史事実にとらわれない歴史を楽しんでいるが、そのムーヴメントはこの時代にはじまったのである。

▲3−1　関ヶ原合戦図屏風

関ヶ原の戦い

狭義には、慶長五年（一六〇〇）九月十五日、不破郡関ヶ原町で、徳川家康率いる東軍が備前岡山城主宇喜多秀家を主将とする西軍を撃破した戦いである。この戦いによって、家康の覇権が決定的になり、三年後の徳川幕府成立へ結びつくことになった。

広義には、日本国中の大名が東西両陣営に分かれ戦火は全国に広がり、それらすべてを含むことになる。さらに、時系列で語るならば、慶長三年秀吉の死去直後から、両陣営に分かれての対立は顕在化しており、最終的には、西軍に与した薩摩島津氏の処遇が決定し戦後体制が定まる慶長七年までを押さえておく必要があるだろう。

▲3−2　松尾山の小早川勢と対峙する大谷吉継勢（一〜二扇）

▲3−3　大谷吉継陣（二扇）

松尾山の小早川勢と対峙する西軍

関ヶ原合戦の趨勢を決したのは、松尾山に布陣していた筑前名島城主小早川秀秋の内応であった。秀秋の動向に疑いをもち、その麓に布陣していたのが石田三成の盟友でもある越前敦賀城主大谷吉継で、吉継は重度のハンセン氏病を押して、輿にのって出陣した。小早川秀秋につられるように、淡路洲本城主脇坂安治・近江朽木城主朽木元綱らも東軍に寝返った。吉継は美濃垂井城主平塚為広らとともに奮闘したものの、為広は討死し、吉継は自刃することになった。

▲3−4　藤子川をわたる後藤基次(三扇)

小西陣へ攻め入る東軍

北天満山の肥後麦島城主小西行長陣へ攻め込んだのは三河岡崎城主田中吉政・伊予宇和島城主藤堂高虎であったが、ここでは石田陣に攻め込んだ豊前中津城主黒田長政、南宮山への押さえを命じられた遠江掛川城主山内一豊を描いている。

▲3−5　藤子川をはさんで小西行長勢と対峙する黒田長政勢・山内一豊勢(三〜四扇)

▲3−6　宇喜多秀家陣（二扇）

▲3−8　宇喜多勢を蹴散らす福島勢（一〜二扇下部）

▲3−7　激突する宇喜多勢と福島勢（一〜三扇中央部）

宇喜多秀家と福島正則の激突

宇喜多秀家は天満山に陣し、東軍の尾張清須城主福島正則勢と激突した。この両軍の激突は一〜三隻の下半を二段にわたって占めており、絵師の関心が高かったことがわかる。上段に宇喜多秀家本陣があり、その先鋒は明石掃部頭全登で、槍の才蔵という異名をとった福島方の可児才蔵と相対している。上段の福島勢を指揮するのは、正則の養子で慶長四年に家康の養女（満天姫）を正室にむかえた福島刑部正之である。

下段は福島勢が優勢となった場面が描かれている。福島正則の周りには福島伯耆・尾関石見がならび　その前方で長尾隼人・福島丹波が奮闘している。さらに右端で山道の旗を持ち、宇喜多勢を蹴散らしているのは、岐阜城攻めで櫓に一番乗りしたという吉村又右衛門（4−9）である。

▲3−9　福島正則陣（二〜三扇）

奮闘する島隊

島左近は石田三成の家臣で、「三成にすぎたるものふたつあり　島左近と佐和山の城」とうたわれた武将である。『関ヶ原軍記大成』によると、島左近は小早川秀秋の裏切りによって戦いの趨勢が定まった後、子新吉郎とともに、家康本陣を目指して、捨て身の攻撃を敢行した。『関ヶ原軍記大成』で島勢の突進を阻んだのは藤堂高虎であるが、絵師は家康の家臣、本多忠勝・井伊直政の軍勢を加えている。

▲3−11　島左近（三扇）

▲3−12　本多忠勝（三扇〜四扇）

▲3−13　井伊直政(四扇)

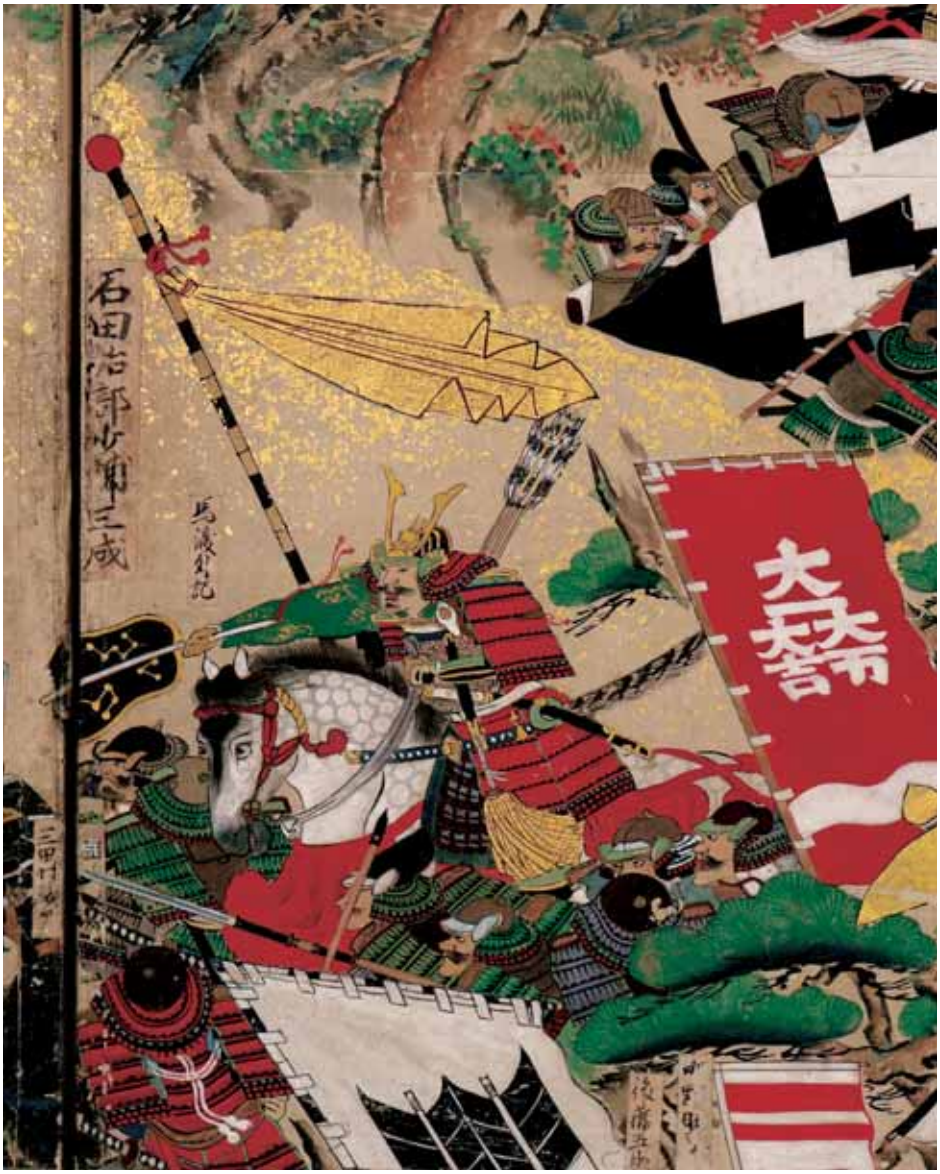
▲3−10　島隊と交戦する東軍(三〜四扇)

▲3−14　藤堂高虎(五扇)

▲3−15　島新吉郎と藤堂仁右衛門の一騎打ち(四扇)

石田三成本陣

「大一大吉大万」の旗印のもと、軍配を握って指揮をするのが、『軍記物』では西軍の首謀者とされた石田三成である。その左側には蒲生大膳・高野越中・蒲生備中など島左近を除く三成の主要家臣が見える。



▲3−16　石田三成（三〜四扇）

▲3−17　石田三成本陣（三〜四扇）

▲3−18　徳川家康本陣（六扇）

徳川家康本陣

「厭離穢土・欣求浄土」の旗を翻し、金扇馬印を掲げた徳川家康の本陣である。家康のまわりには配下の諸将がひかえるが、興味深いのは、少し離れて家康に語りかけようとしている山本帯刀である。一般的な『軍記物』には登場しないが、『甲斐国志』では、山本勘助の弟とする人物で、絵師は山本帯刀を家康の軍師、島左近を三成の軍師と相対するように描いてみせたのである。

▲3−19　徳川家康本陣（五〜六扇）

▲3−20　島津義弘(四〜五扇)

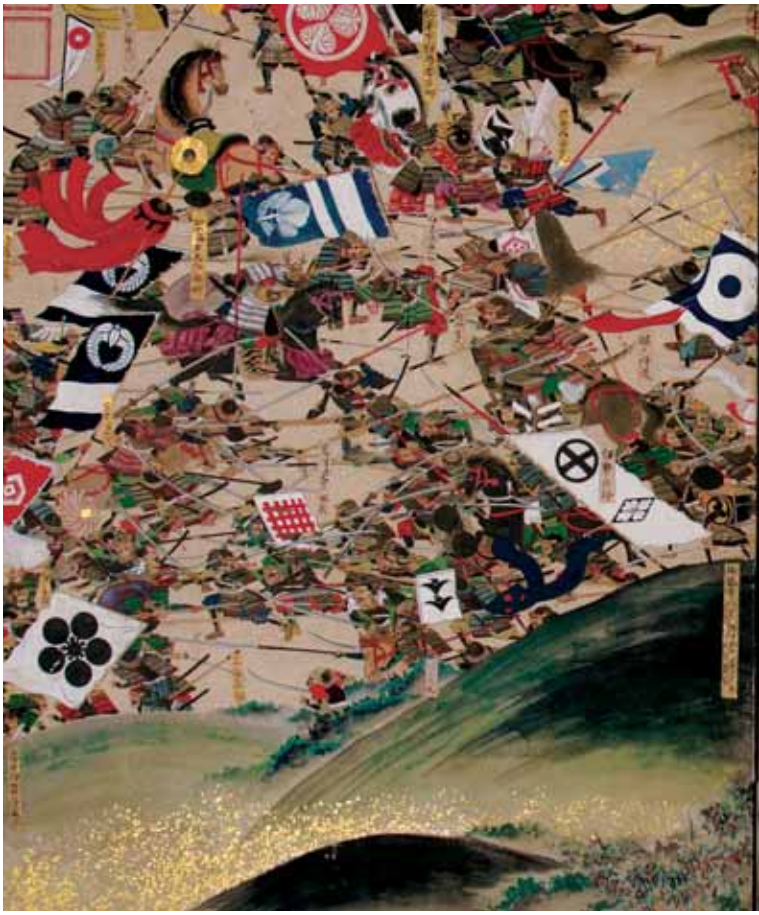
島津の退き口

関ヶ原合戦のフィナーレを飾るエピソードは島津勢の敵中突破である。小早川秀秋の裏切りによって壊滅状態の西軍諸将が討死したり西方へ敗走する中、島津義弘は前面の敵を突破し、伊勢へ逃走する道を選んだ。その先鋒をつとめたのは、甥の豊久である。

島津勢は田中吉政・藤堂高虎勢をたちまちうちやぶり、その決死ぶりに福島正則もあえて追撃を見送った。その島津勢を追走したのは、家康の実子でもありこの日初陣をむかえた武蔵忍城主松平忠吉と井伊直政・本多忠勝であった。

島津勢は豊久をはじめ多大な犠牲をはらいながら脱出に成功する。追撃した松平忠吉・井伊直政も負傷するありさまで、「島津の退き口」として語りつがれることになった。

▲3−21　島津勢の先鋒・豊久と激突する東軍の松平忠吉・加藤嘉明（五〜六扇）



▲3−22　敵中突破をはかる島津勢（五〜六扇）

関ヶ原合戦図絵巻

江戸時代にもっとも多く流布した関ヶ原合戦図絵巻である。伏見城での合議から関ヶ原合戦当日までの経過を題材にしている。戦いにおける個人の活躍が強調されており、「武辺咄」を集成したといった構成である。この絵巻を需要した人々が歴史からなにを学びたかったのかがうかがわれるだろう。

上巻

▲4−1　伏見城内での合議〜伏見城攻め

▲4−2　伏見城攻め

▲4−3　五大老・五奉行・三中老の合議

▲4−4　松平家忠の奮戦と矢文を射る鵜飼藤助

▲4−5　伏見落城　鳥居元忠の最期

▲4−6　木曾川をわたる東軍　池田長吉の活躍

▲4−7　津田藤三郎と兼松正吉の一騎打ち・革手まで出陣した織田秀信

▲4−8　革手に出陣した織田秀信本陣

▲4−9　津田藤三郎の帰城・岐阜開城

▲4−10　合渡川の戦い

下巻

▲4−11　木曽路をすすむ東軍　真田隠岐守と真田幸村

▲4−12　染谷平の徳川秀忠本陣　上州沼田城

▲4−13　杭瀬川の戦い・岡山本陣

▲4−14　西軍諸隊・南宮山に備える東軍

▲4−15　東軍諸隊・島津勢と戦う松平忠吉

▲4−16　井伊直政・細川忠興・大谷吉継

▲4−17　湯浅五助・真田信幸

▲4−18　雨中の松と道

岐阜市歴史博物館本 賤ヶ岳合戦図屏風について

土山公仁

（1）

戦国合戦の中で、もっとも数多く屏風の画題となったのは、関ヶ原の戦いである。数多くの武将たちが実際に参戦しただけでなく、近世大名たちにとって藩祖が活躍し、自藩のアイデンティティが確立された戦いであり、それを顕彰するため多くの需要があったことは容易に理解できる。その関ヶ原の戦いについて多くの屏風がつくられたのが、賤ヶ岳の戦いだった。この戦いが七本槍という劇的な場面があり、小瀬甫庵の『太閤記』などにより広く知られていたこと、家康が登場しないことで、幕府から咎められる恐れが少なく商品化に適していた、という見解もあるが（藤本一九九五）、まだ充分に糺明されているわけではない。

（2）

『賤ヶ岳合戦図屏風』は三類に分類することができる。Ⅰ類は、最もグラフィック等で使われることが多い大坂城天守閣本とそれを直接写したと考えられている作品（馬の博物館本・佐藤博物館本）である。Ⅱ類は、大阪城天守閣本を軍勢描写などの上で簡略化したように描かれているもので、最も数多く製作された。その代表作は現在大阪城天守閣の所蔵となっている旧田中家本で、その他に長浜城歴史博物館本・南蛮文化館本・勝山城博物館本などが知られている。Ⅲ類は岐阜市歴史博物館本で、他の諸本が一双に描いたシーンを右隻にまとめ、左隻は独自の構図である。

（3）

祖本と考えられているのは、大阪城天守閣本である。十七世紀後半の成立と考えられ、全体の構成が『甫庵太閤記』に依拠しながら、肝心の七本槍の場面は『川角太閤記』の記述にしたがっていることも注目されてきた（『戦国合戦絵屏風集成』二　一九八〇）。この点について高橋　修氏は、紀州藩主徳川頼宣が軍事研究のため製作させたものが大阪城天守閣本で、川角宗直が頼宣の求めに応じて提出した『川角太閤記』の原型が七本槍の場面で採用された、という仮説を提示している。また旧田中家本も紀州藩の家臣に伝来し、『賤ヶ岳合戦図屏風』の流布に紀州藩が強くかかわっていると主張した（高橋一九九七）

Ⅱ類はⅠ類を簡略化させた、と考えられてきた。しかしⅠ類は砦を瓦葺屋根・石垣・漆喰塀といった非現実的な近世城郭の姿で描き、Ⅱ類が土塀や板葺屋根といったより中世的な描き方をしていることも注目されてきた。『戦国合戦絵屏風集成』二　の図版解説を渡辺　武氏とともに中心となって執筆し、大阪城天守閣本祖本説を主導してきた内田九州男氏も「単純に大阪城天守閣本の写しとばかりはいい切れない面もある」と微妙に発言を変化させている。（内田九州男一九九五）

Ⅲ類の岐阜市歴史博物館本は孤本とみなされている。しかし、そこに描かれた図像は大阪城天守閣本と密接な関係がある。大阪城天守閣本右隻五～六扇に描かれた余呉湖岸にそって佐久間勢を追走する秀吉方は岐阜市歴史博物館本右隻一～二扇下部、琵琶湖岸にそって佐久間勢を追走する秀吉方の図像と近似することなどが指摘されている（藤本正行一九九四・一九九五）。また、大阪城天守閣本左隻五～六扇に描かれた岩崎山砦を攻める佐久間盛政勢と岐阜市歴史博物館本右隻五～六隻に描かれた大岩山砦を攻める佐久間盛政勢の描き方も近似するなど、岐阜市歴史博物館本を単純な弧本と解することはできない。

なお、岐阜市歴史博物館本左隻については、柴田勝家が逃走する時間をかせぐため勝家から金の御幣の馬印を預かり奮闘した毛受勝助とともに、茂山に布陣しながら戦線を離脱し、柴田軍総崩れの直接的原因をつくった前田利家陣を大きく描いていることから、この屏風は前田家周辺で製作されたと考えられてきた。

（4）

諸本の前後関係をどのように考えたらよいだろうか。すでに述べたように『賤ヶ岳合戦図屏風』については、大阪城天守閣本を祖本とみなすという考え方が有力視されてきた。その考えに立てば、岐阜市歴史博物館本は大阪城天守閣本の一双を右隻に無理やりまとめ、新たに左隻を加えたということになるだろう。そう考えた方が、右隻の琵琶湖側から見た時の、大岩山砦、岩崎山砦、賤ヶ岳砦の位置関係が地理的に矛盾することも説明できるだろう。また、後述するように砦の描き方がⅠ類でなくⅡ類に類似していることもあり、岐阜市歴史博物館本はⅡ類をもとにして成立したと考えられてきたように思う。成立年代も漠然と十八世紀とみなされてきた。

しかし、岐阜市歴史博物館本は左隻の構図とともに、大阪城天守閣本や旧田中家本とまったく異なっている点がいくつかある。その第一は山の描き方だ。岐阜市歴史博物館本には、他本のように山肌に緑青を使用したのっぺりした表現でなく、さまざまな墨線を駆使して、実景に即し（風景を実写したという意味ではない）リアリティが感じられるような描き方で、『桑実寺縁起』に通じるような室町後期の大和絵の余韻が十分感じられるのである。（菅原真弓氏ご教示）

特定の人物を絵画化することに対してタブーが強く働いているのも岐阜市歴史博物館本の特徴である。羽柴秀吉の在陣は賤ヶ岳砦にかかげられた金瓢箪で美濃からの帰陣を表現しているにすぎず、丹羽長秀に関しては、丹羽勢すらはっきりとは描かれていない。大岩山砦で戦死した中川清秀本人が他本では大きく描かれているのに岐阜市歴史博物館本では描かれていないのとは異なったレベルである。七本槍についても、『甫庵太閤記』に従ったことが貼札からわかるが、個人の特定は不可能だ。

丹羽勢の不在について少し考えてみたい。丹羽長秀は逃げ出した桑山重晴にかわって、琵琶湖から賤ヶ岳砦に入城し確保しつづけるといった重要な役回りをはたした（『甫庵太閤記』）。岐阜市歴史博物館本はあえてその活躍を無視し

たのではないかともさえ思われるのである。丹羽長秀のあとをついだ丹羽長重は関ヶ原合戦で西軍に与し、前田利長と浅井畷で戦っている。そのしこりが、丹羽勢の不在の要因になったのではないだろうか。

柴田方についても、柴田勝安・毛受勝助については容易に想定できるものの、大岩山砦を攻める佐久間盛政も三引両の吹流しと采配・軍配団扇の所持によってうかがえる程度である。

秀吉と敵対したこの戦いの主人公である柴田勝家も描かれておらず、茂山の前田利家陣にも利家らしい人物は描かれていない。右隻に三度描かれた可能性のある人物として徳山五兵衛則秀がいる。大岩山砦を右方向から攻める軍勢の中に則秀の大きな日の丸の馬印が見えるし、その右の岩崎山攻めや下部の撤退のシーンでも、貼札にその名前が記されている。しかし、いずれも則秀を特定できないのである。

このように人物を特定できないように描くのは、大阪市歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』や名古屋市博物館本『長篠合戦図屏風』など初期合戦図屏風に通じる特徴である。

（5）

この作品が、大阪城天守閣本などに先行する可能性を指摘したが、細部の表現に注目することで、その考えを補強しておこう。

まずは太刀や刀の装着方に注目してみた。一般に太刀は刃を下にして帯取の緒で腰につるして佩き、刀は刀の刃を上にして腰に指すものである。大阪城天守閣本では、掟どおり太刀を佩き、脇差を腰に指して描かれている。

しかし、戦国時代には軍装として刀の刃を下に腰に指すのが流行した。藤本氏は刀の先端が上反りになり走ったり座ったりするのに便利であったと指摘している。（藤本一九九七）。岐阜市歴史博物館本では、拵が単純化して描かれているため、詳細は把握できないものの、基本的に刃を下にして描かれている。一部は腰紐の下部に描かれ太刀を佩いていると考えられるが（図1）、大半は腰紐と交差する位置に描かれ、刀を刃を下に鳥居指していると思われる。なお、一部には脇差をあらわした直線も添えられている（図2）。

刀を鳥居指にした画像資料としては、大阪市歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』・名古屋市博物館本『長篠合戦図屏風』・富山個人蔵『戦国合戦図屏風』・大阪城天守閣本『大坂夏の陣図屏風』・旧田中家本『賤ヶ岳合戦図屏風』・秋月郷土館本『島原の乱図屏風』・サントリー美術館本『日吉山王・祇園祭礼図屏風』などがある。このうち『島原の乱図屏風』は十九世紀の成立であるが、『日吉山王・祇園祭礼図屏風』は十六世紀中葉、他の屏風は・旧田中家本『賤ヶ岳合戦図屏風』を除くと十七世紀前半におさまりそうだ。鳥居指は戦国時代から江戸初期に流行した祭礼や軍陣での趣向だったろう。（『日吉山王祇園祭礼図屏風』については池田宏氏、『島原の乱図屏風』については佐多芳彦氏のご教示による）

藤本氏があわせて指摘している大阪市歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』や富山個人蔵『戦国合戦図屏風』に頻出する刀を刃を上にして右肩にかつぐようなポーズも、岐阜市歴史博物館本で見ることができる（図3）。槍や鉄砲、弓、旗についても、右肩にかついだ方が合理的で、岐阜市歴史博物館本の柴田勢敗走シーンにそれも数多く描かれている（図4）。なお、大阪城天守閣本では槍は両手で持つものが多く、肩にかつぐシーンはほとんど見られない。

（6）

次に甲冑に注目してみよう。戦国合戦図屏風に描かれる甲冑はかなり定型化簡略化して描かれているので、細部の検討はむずかしい。ここでは、当世具足の指標のひとつである指物を差すための装置（合当理）と指物の指し方に注目してみた。大阪城天守閣本では腰に鷹羽を指し大岩山砦をめざした佐久間久右衛門の軍勢を除くと、背中に合当理を描き、指物をまっすぐ指している。また、陣笠を被り火縄銃を構えるスタイルの城兵も大岩山砦に描かれている。

一方、岐阜市歴史博物館本では、陣笠は無論のこと合当理と断定できる描き方はしていない。指物が背中心であれば、絵画として合当理が省略されたとも考えてよいが（図5）、明らかに右腰のあたりから、斜めに指すものも多数描かれている（図6）。このように指物を右腰側にずらして指す例は、大阪歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』に数多く見え、サントリー美術館本『日吉山王・祇園祭礼図屏風』でもうかがえる。先にあげた岐阜市歴史博物館本の背中心にある指物も、たまたまその位置の腰紐に指したと考えてよいのではないだろうか。ちなみに『日葡辞書』でも、旗をさすとは、腰に指すことと解し、十七世紀初頭の段階でも、合当理ですらまだ十分に普及していなかったと思われる。

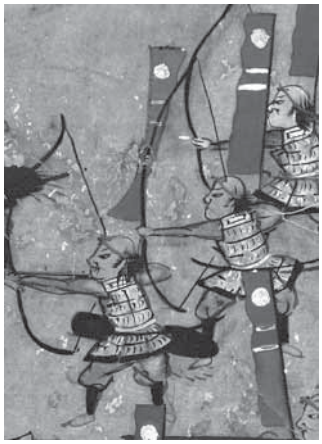
兜を着用しない兵たちの頭髪の表現についても、岐阜市歴史博物館本が露頂と総髪（図7）を明瞭に描き分けるのに対し、大阪城天守閣本では明瞭な差は見えず、岐阜市歴史博物館本と比べると後髪も耳からかなり上部まで残されている。

（7）

砦の描き方についても若干ふれておこう。岐阜市歴史博物館本と旧田中家本の関係についてはすでに藤本氏の指摘がある。岐阜市歴史博物館本の賤ヶ岳砦は、板葺き屋根、白塀と鼠塀を描く、田中家旧蔵本の砦を左右に逆転した形に描いており、塀の下に土の墨壁を描いた点が異なっている。さらに、岩崎山砦、大岩山砦については、砦の名称は逆転しているが、建物の配置を含めて構造は非常によくにている。細かい違いはあるが、左側の砦の本丸に軍配団扇の馬印が描かれている点なども一致している。大きく異なるのは、狭間の描かれ方だ。旧田中家本では、長方形・円形・正三角形の狭間が一列に描かれているのに対し、岐阜市歴史博物館本では、円形と三角形が下段、長方形が上段になるよう二段に描かれている。（図8）上段の狭間からは弓矢の鏃が頭をのぞかせ、下段の円形・三角形の狭間からは火縄銃の銃口が見える。弓は立って、鉄砲は腰を低くして構えるのが適しており、弓の場合は矢が放物線を描くので、射撃方向より上方

▲図5

▲図1


▲図6

▲図2

▲図7

▲図3

▲図8

▲図4

に標的がくるため、長方形の狭間が必要だった、というリアリティのある描き方をしているのである。

（8）

ディテールの描き方に注目しても、岐阜市歴史博物館本は大阪城天守閣本に比べリアリティがありそうだ。少なくとも、大阪城天守閣本を祖本にして、城郭をはじめとする風俗考証をほどこしたと考えるべきではなく、むしろ岐阜市歴史博物館本が実際の戦国合戦についての情報が残っている時代に描かれたと考えてよいのではないだろうか。また、砦の描き方等で述べたように、岐阜市歴史博物館本は旧田中家本とも密接な関係があるのは確かで、三本の成立順序を考えるならば、岐阜市歴史博物館本・旧田中家本・大阪城天守閣本というシークエンスにならざるをえないだろう。この作品の成立年代をいつころまでさかのぼらせることができるだろうか。

この作品の構図は『甫庵太閤記』をベースにして、さらに聞き取り調査等をして描かれたものだろう。『甫庵太閤記』は寛永十四年（一六三七）までには刊行されているが、甫庵じしんは寛永初年（一六二四）に加賀藩主前田利常に仕えており、この作品が前田家周辺で制作されたとすると、刊行前であっても甫庵から情報の提供をうけることも可能であり、寛永初年まで上限を引き上げてかまわないだろう。（4）でコメントを紹介した美術史の菅原さんも十七世紀前半というお見立てであり、寛永年間をあまりくだらない時期の制作と考えておくことにしたい。

（9）

戦国合戦図屏風というと、誰がどのようなシーンで描かれているか、という分析と解説に主眼がおかれすぎてきたように思う。絵画を史料として解析する試みは近年多くの成果をあげてきたが、戦国合戦図屏風については、藤本氏の研究をのぞくと低調といわざるをえないし、個別の作品研究についても、十分な蓄積がなされているとはいえない。

今後、研究がすすめば、個別の作品について、その年代観を修正する必要のある作品もでてくるだろうし、ディテールが風俗画として研究対象になりえる「初期戦国合戦図屏風」が増えてくれば、その分析を通じて文献史料ではうかがえなかった戦国合戦のリアリティについても語れるようになるだろう。

本稿は、歴史系博物館が意識的に避けてきた戦国時代のコーナーで戦国合戦図屏風を陳列することがどのような意味をもつのか　という質問に対して、ぼくなりの回答として認めてみた。その過程で、所蔵者の側に立ったかなり恣意的な資料操作を行った　と思われるかもしれないと、少しだけ反省している。それも屏風のディテールをこんな風に見て欲しい、という職業上の顕著な病状としてお許しいただければ、望外の仕合せです。

了

参考文献

内田九州男
「賤ヶ岳合戦図屏風」『別冊歴史読本　10　戦国合戦図屏風』新人物往来社　一九九五

高橋　修
「戦国合戦図屏風と紀州徳川家」『戦国合戦図屏風の世界』和歌山県立博物館　一九九七

藤本正行
「岐阜市歴史博物館蔵賤ヶ岳合戦図屏風を読む」『歴史読本スペシャル45』新人物往来社　一九九四
「入門戦国合戦図屏風」『別冊歴史読本　10　戦国合戦図屏風』新人物往来社　一九九五
「戦国合戦図屏風の風俗考証ー武装と城郭についてー」『戦国合戦図屏風の世界』和歌山県立博物館　一九九七

『戦国合戦絵屏風集成　二　賤ヶ岳合戦図・小牧長久手合戦図』一五八〇　中央公論社
同巻の執筆者は桑田忠親・岡本良一・宮島新一・内田九州男氏である。

作品解説

1　賤ヶ岳合戦図屏風　紙本著色
六曲一双　一二一・七×二六四・八
十七世紀前半

1―3・i―4
この作品に描かれる砦に共通する特徴は、二段の狭間をもつ塀をめぐらし、中に板葺の建物を描く点である。但し、賤ヶ岳砦に関して二点例外がある。ひとつ土塁の上に塀を築くことと本丸曲輪をとりまく壁を漆喰で仕上げている点で、後者は旧田中家本にも通じる特徴である。
賤ヶ岳砦にはさまざまな旗指物が掲げられている。左端に秀吉の馬印、金瓢箪が描かれているが、豊臣家を象徴する赤の吹貫はみられない。また、丹羽長秀の軍勢を明らかに示すものもない。賤ヶ岳砦の左下に中野又兵衛一安の守る砦が描かれているのも岐阜市歴史博物館本の特徴である。一安は賤ヶ岳七本槍のモデルになった小豆坂七本槍の一人であるが、賤ヶ岳合戦時の具体的な戦功は不明で。この又兵衛は大阪城天守閣本・旧田中家本では秀吉のすぐ前方に描かれている。この図の左方（二扇三扇にまたがる上方）に羽柴秀長が守備した田上山砦が描かれている。

1―5
柴田軍攻撃に出撃する秀吉勢である。長大な槍をもった一団が先頭に立ち、ややさがった位置に鉄砲・弓矢をもった兵が続く、刀だけをもった兵がほとんど描かれていないのも岐阜市歴史博物館本の特徴である。旗指物はさまざまなバリエーションが見え、卍が蜂須賀家政、丸に十の字が加藤嘉明、沢瀉が福島正則を示しているかも知れない。

1―6・i―7・i―8
琵琶湖を追撃する秀吉軍。大阪城天守閣本でこのシーンは左隻に描かれ、琵琶湖湖畔でなく、余呉湖側から描かれている。しかし、絵師にとって、地理的な位置関係を正確に絵画化することは重要なことであったと思えない。大阪城天守閣本との比較では、枝弦の旗指物を羽柴秀勝とともに追撃する木村（隼人）重茲勢ということになるが、左隻に描かれる木村（隼人）重茲が守備した神明山砦の旗指物とは一致しない。

1―9
柴田勝安は　賤ヶ岳の峰筋にある堀切を防御戦として佐久間盛政の撤退を助けた。（『甫庵太閤記』）。岐阜市歴史博物館本はその堀切を顕著に描いてみせ、そこを越えたあたりで、賤ヶ岳七本槍の活躍を描くが、個人の特定まではできない。
他本との比較で、白柄弦が脇坂、金扇を平野、さらに赤地に日輪を加藤清正あたりに比定できるかもしれないが、岐阜市歴史博物館本を賤ヶ岳合戦図屏風の祖本と見る考え方からは、人物比定はあまり意味がないかも知れない。

1―10・i―11
金の鎌付槍と金熊が勝安の馬印、裾赤黒白段々の旗が勝安の旗である。それ以外にも、黒地に金で家紋を描いた個人を表すさまざまな旗が見える。馬印のすぐ左にある雁金の旗は勝安が勝家の養子であったことにちなむのだろう。なお、この旗は背に指すのではなく、手で前に持っている。大阪市歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』などでは、背に指し旗の先端からのびた紐を手で握る姿が描かれているが、当世具足が普及していない時代にはこのような支え方をしたと考える方が合理的だと思う。

1―12
琵琶湖を撤兵する柴田勢である。この一群は左隻の佐久間盛政を先頭に、右隻まで続いている。白黒斜め分け、白赤斜め分け、白黒斜め分けに日の丸は徳山規秀の軍勢で、貼札にも徳山五兵衛退散処と記されているが、規秀は特定できない。さらに後方の黒白段々斜め分けの旗は不破勝光の軍勢だろう。

1―13
鷹の羽を腰にさして左から攻めているのは佐久間久衛門勢、右から攻めている三引両の旗の軍勢は佐久間盛政の軍勢である。右側の注記には不破彦三・徳山五兵衛の名も見えるが、右側の日の丸の旗が徳山勢と思われるだけで、不破勢は描かれていない。
なお、右隻全体の構図は下方に琵琶湖があるため、琵琶湖側からみた景観のようにも見えるが、そうすると大岩山砦・岩崎山砦の位置関係が逆転する。この部分は下方に描かれる余呉湖側から見た配置なのである。

1―15
大岩山砦を左方から佐久間盛政、右側から徳山勢が攻撃をしかけている。佐久間玄蕃・同久衛門・不破彦三・徳山五兵衛が攻め落としたと注記にあるが、久衛門勢、不破勢ははっきりしない。
佐久間盛政の右方、柵を越えて、赤の陣羽織を羽織り采配をもっている人物は、南蛮文化館本等の貼札では、拝郷五左衛門である。その左に扇を旗印にしている一隊とその最後尾で、日の丸の軍配団扇をもって騎乗している人物も有力武将と思われるが、特定できない。
なお、他本では城門の前に、中川清秀と近藤無一郎の槍あわせを描いている。

1―16
この一隊の柴田勢の旗指物は、柴田勝安陣（1―11）と共通し、勝安の敗残兵と思われる。

1―17
右隻から続く、撤兵中の佐久間盛政勢である。先頭には注記と三引両の吹流しがあり、佐久間盛政であることがわかるが、右隻大岩山砦攻め（1―15）の出で立ちとは一致せず、むしろ勝安（1―10）に近い。担架で負傷者を運搬する描写も珍しいだろう。

1―19
鍾馗に金の日の丸軍配の馬印、梅鉢紋の旗がたなびく前田利家陣である。
「前田利家が二千余の人数を二段に備えた」という記事は『甫庵太閤記』による。

1―20
右端に柴田勝家の馬印があるが、その周辺には、勝家の雁金の旗ではなく、裾赤白黒段々の柴田勝安陣の旗が見える。よって、この砦は勝家が在陣しているのでなく、勝家から馬印をうけとり、最期の迎撃体制をととのえるため毛受勝助が入城した林谷山砦（『甫庵太閤記』）と考えられている。

1―21・i―22
金の御幣の馬印の前方、騎乗した人物が毛受勝助と思われる。

2　大坂夏の陣図屏風　紙本著色
六曲一双　一二九・九×二八一・六
十八世紀後半

一九八七年大阪城天守閣で開催された特別展『大阪城四〇〇年の歴史』で見出された屏風である。当時は九州に伝来していた。当時の図録と比べると、上下段の金の槍霞の形状がことなり、この部分は近年になって補修されたものであることがわかる。画面を上下に区画する槍霞も不自然に背景や人物を隠してしまう部分もあり、これも比較的新しい時期に修理されたものだろう。なお、石川県立歴史博物館本『大坂夏の陣図屏風』は岐阜市歴史博物館本の左隻にあたる。

2—1・2—2
右隻上段は真田幸村・下段は後藤又兵衛という大坂方のスーパースターの最期の戦いを描いている。上段の左側に見えるのは、真田幸村が最期に布陣した茶臼山である。現実の茶臼山は全長二〇〇mの前方後円墳であるが、絵師はこれを広大な丘のように描いている。左隻は大坂夏の陣の最終局面、天王寺口、岡山口の戦いを描いている。

2—3
重要な人物に実際は着用したはずのない大鎧風のいでたちで登場させるのは、大阪城天守閣本『大坂夏の陣図屏風』の徳川家康の表現に見えるが、江戸時代になって武将の権威・格式を表すため、復古調の鎧が大名家などで象徴的に用いられるようになると、戦国合戦図屏風にも大鎧風の甲冑が多数描かれるようになった。松平忠直の具足は、鳩尾板・梅檀板は描かれず、草摺の形状も大鎧とは異なっているが、胴正面は平面で弦走韋がはられるという大鎧風に描かれている。
忠直の前に見える松平伊予守忠昌は、忠直の弟、忠直改易後、越前北庄を継承した。

2—4
中期戦国合戦図屏風の特質は文学による歴史の再構成である。戦記文学は歴史に踊らされた個人のきらめきにフォーカスしながら、叙事ではなく叙情を語ろうとする。その影響は、戦国合戦図屏風の戦いの場面にもよくあらわれている。『賤ヶ岳合戦図屏風』とこのシーンを比べると、人物の特定が可能である他にも、鉄砲や弓矢といった飛び道具がほとんど登場せず、主として刀や短めの槍を手に生死を賭した一対一の対決の場面が多く描かれている。左端は野元(本)右近、右近と対峙する武将は御宿政友だろう。その左上の大谷大学は大谷吉継の子である。

2—5
長刀を両手に持ち、白馬で駆け抜けようとしているのが真田幸村である。「真田其日の装束には、緋縅の鎧に、抱角打つたる冑に白熊つけて猪首に着なし」という『難波戦記』の記述に合致する。幸村の上方には渡辺糺、茶臼山の向こう側には大坂七手組のうち真野頼包・野野村吉安・中島氏種・堀田盛重が描かれている。

2—6・2—7
この孤立した一隊を囲む東軍諸将の顔ぶれから、その中央で采配をもった馬上の人物が後藤基次であることがわかる。『難波戦記』は基次の出で立ちを黒糸威の鎧、總白の旗、黒半月の馬印と記すが、この作品には一致しない。しかし、後藤基次の旗を白黒段々とする記述(『三和休庵咄』)もあり、絵師はさまざまな情報をもとにこの絵を構成したことがわかる。

2—8・2—9
右側から後藤基次隊を囲む軍勢は貼札から甲斐庄喜右衛門・桑山貞晴などが特定できるが、この一隊の主役は水野勝成である。二階傘の上に切り裂きを付けた馬印、水色に永楽通宝の旗は勝成のものである。

2—10
左側から後藤基次隊を囲む軍勢の中心は日の丸の軍扇を手にした隻眼の武将・伊達政宗。その左上に描かれる松平忠明は奥平信昌の四男で徳川家康の外孫にあたる伊勢亀山城主。夏の陣では、加納藩を含む美濃諸将も束ね出陣した。そのため、その後方に遠山友政(苗木藩主)・徳永昌重(高須藩主)といった美濃の領主が描かれている。

2—11
石川県立歴史博物館本の貼札からこの頭上に棒のようなものをふりあげた人物が本多忠朝であることがわかる。
『難波戦記』にはこの日の忠朝の装いを黒糸威の鎧、鹿角の冑、蜻蛉切の大身槍と記しているがそれには一致しない。しかし、『難波戦記』には、忠朝が上総大多喜城を出陣する際、八尺ばかりで手元三尺ほど丸くしてある八角の鉄棒を前に立て上洛してきたことも伝えており、それを表したものと思われる。忠朝の後方には徳川四天王のひとり榊原康政の孫にあたる大須賀忠次も描かれている。

2—12
石川県立歴史博物館本の貼札から紺糸威の鎧を着て、馬上で采配をふるう人物が毛利勝永であることがわかる。その前に描かれる鳥毛の輪貫は勝永の馬印である。

2—15
岡山口から攻めたのは前田利常を先鋒とする部隊で、梅鉢文がところどころに見える。

2—16　2—17
鉈紋の旗の大野治房勢、豊臣家を象徴する赤い吹貫は大野治胤勢のもので、すでに城外での戦いに破れ、城内へ逃げ込んでいる。胴正面に鉈紋を描いた赤糸威の大鎧風の鎧を身にまとうのは大野治房であろうか。

3　関ヶ原合戦図屏風　紙本著色

六曲一隻　十九世紀
一五五・七×三五七・八

石田三成本陣側から、島津勢の活躍や宇喜田秀家と福島正則の戦いを大きくとりあげた独特な構図の関ヶ原合戦図屏風である。
家康の描き方、画面中央に鍾馗の旗を印象的に配置する手法などから、福井県立歴史博物館本『姉川合戦図屏風』と同一工房作と考えられている作品である。『姉川合戦図屏風』は天保八年(一八三七)三月、林義親の手になる作品で、この作品もそれに近い時期のものと考えられている。
但し、姉川合戦図屏風と比べると、戦場が広大であるため、画中に山並みや樹木などを印象的に配置し、遠近法を大胆に取り入れており、時代もさらに降るだろう。武将たちは躍動感にあふれ、同時代の錦絵の武者絵に近い感覚であるが、三扇〜四扇上部の樹木や土坡の表現などに、大和絵系あるいは円山四条派系の描法も見られ(菅原真弓氏ご教示)、この屏風製作に関与した工房の多様性がうかがえる。

3—2
松尾山の小早川勢と対峙する大谷吉継勢である。この図の右下には、小早川秀秋とともに東軍に寝返った朽木元綱・脇坂安治らが描かれるが、進行方向は大谷陣に切りかかるのでなく、屏風の右側へフェイドアウト・退却するように描かれる。絵師の思いが伝わってきそうである。

3—3
大谷吉継は軍記物では大谷吉隆と表記されることが多い。吉継は重度のハンセン氏病を患っていたが、ここでは堂々たる武者ぶりである。貼札は大谷刑部少輔とすべきところを形部少輔と記している。この屏風を需要した層が従来の戦国合戦図のように上級の武士であったらありえない誤りであろう。

3—4・3—5
この場面で絵師が描きたかったのは後藤又兵衛基次である。黒の鎧、黒半月の前立は又兵衛基次の象徴である。

3—6・3—7・3—8
この屏風の中で主役級の扱いをされている東軍の武将は福島正則である。正則は関ヶ原合戦での戦功により、安芸広島城主となったが、後に城の修築を名目に改易されてしまった。この屏風を描いた絵師の心情がそんなところにもあらわれている。
『関ヶ原軍記大全』では、宇喜多の旗印を太鼓、福島の旗印を

山道と記している。山道文は大阪市歴史博物館本『関ヶ原合戦図屏風』をはじめ基本的に縦方向にデザインされるが、この屏風の絵師はそれを横方向にして描き、太鼓文にいたっては、馬印の上部に太鼓を描いてみせている。

3—10・3—11・3—12・3—13・3—14・3—15
島左近の姿は、懐中から水晶の珠数を取出して襟に懸け、白柄の長刀をもって本多勢・井伊勢と戦ったという『関ヶ原大全』の記述に従っている。
突出する島隊の先陣には島新吉郎が描かれている。新吉郎は左近の子、藤堂玄蕃を討ち取ったものの、その郎党に討ち取られてしまった。この場面で新吉郎と対峙するのは藤堂仁右衛門、仁右衛門は大谷吉継の臣・湯浅五助とのエピソードで知られている人物で(4—16)、玄蕃はさらに後方に描かれている。

3—16・3—17
星文様の軍配団扇を手にする馬上の石田三成は鳩尾板・栴檀板も描かれた赤糸威の大鎧を着ている。そのまわりには多くの家臣たちが描かれている。なお、石田陣の左側には、石田陣に攻め入る織田有楽・竹中重門・細川忠興勢が描かれている。

3—18・3—19
徳川家康の描かれ方は『姉川合戦図屏風』に酷似し、同一工房作とみなすひとつの根拠になっている。家康の周りには旗本クラスがならび、やや離れて大須賀忠政・奥平忠昌・松平忠明ら有力武将がひかえている。さらにその下方に酒井重忠の率いる一隊が描かれている。

3—20・3—21・3—22
島津勢の中でも、義弘は後姿で描かれているのに対し、叔父義弘を逃れさせるために戦死したという豊久を大きく描く。対峙する東軍は家康の四男で関ヶ原で初陣を飾った松平忠吉と加藤嘉明である。

4　関ヶ原合戦図絵巻　紙本淡彩　二巻
上巻四二・九×一二三六・五
下巻四二・九×一二九九・〇　十九世紀

類本が多数知られているが、上巻もしくは下巻が単独で伝来することも多い。祖本は江戸時代中期に制作されたと考えられている。絵巻を制作するにあたってさまざまな文学作品を調べた形跡があり、家康を描くことに対してのタブーも強く働いている。十八世紀としても比較的早い段階に原本が成立したのではなかろうか。
全貌は『戦国合戦図絵屏風集成　三　関ヶ原合戦』中央公論者一九八〇で紹介されているが、シーンの前後関係が異なっており、原本の構成については、類本の集成が必要だろう。

4—1
家康をのぞく五大老(浮田秀家・前田利家・毛利輝元・上杉景勝)と五奉行(石田三成・前田玄以・浅野長政・長束正家・増田長盛)と三中老(堀尾吉晴・中村一氏・生駒親政)。この場に家康が描かれないのは、家康を描くことに対してのタブーが働いたからである。

4—2
絵巻に記される徳川軍の配置は本丸が鳥居彦右衛門(元忠)、西の丸が内藤弥次右衛門(家長)、名古屋丸が松平五右衛門(近正)、大手守将が松平主殿助(家忠)である。

4—3
五大老五奉行三中老は『太閤記』には登場する用語。同時代史料では五大老が奉行、五奉行が年寄とよばれ、三中老は実態として機能していない。

4—4
『関ヶ原軍記大全』によると、徳川軍は大手口をあけわたし、二の丸以下に兵を集結させた。押し寄せる西軍に対し、松平家忠らは二の丸門を開き、討って出て大活躍した。
甲賀出身の鵜飼藤助は長束正家の臣。正家は伏見城松丸に徳川方として甲賀衆が籠城していたのを知り、鵜飼藤助に命じて、内応しなければ妻子を捕縛し磔刑に処する旨を矢文にして射させた。

4—5
奮戦する内藤家長と鳥居元忠が描かれている。
鳥居元忠は自刃をすすめた家臣に対し、一人でも多くの敵を倒し、伏見城に西軍をひきとめるのが使命であると断り、最期まで奮闘した。『常山紀談』によれば、戦い疲れて玄関に腰をかけていた元忠の前に雑賀孫市重次があらわれた。元忠は名をなのり、自刃して首をわたした。

4—6
岐阜城をめざし、河田渡をすすむ東軍。一柳直政が先頭に描かれる。後続部隊の上部に堀尾忠氏の家臣が夜中ぬけがけして川を渡ったと記しているが、出典は不明。堀尾忠晴(忠氏の長男)は一柳が川下にむかうのを見て、容易にわたる瀬があると判断し、後に続いた。『関ヶ原軍記大全』によれば、この戦いの一番首は一柳家臣大塚権太夫が秀信家臣武市善兵衛からあげた。その権太夫も飯沼小勘平に討たれてしまう。
池田長吉は池田輝政の弟。『関ヶ原軍記大全』によれば、小勘平は馬を手に入れるため長吉に声をかけ、ふたりの戦いがはじまった。この時、池田家臣伊藤與十郎は長吉にかわって戦おうとしたが、かえって長吉に「汝は見物しろ」とたしなめられた。小勘平は大塚との奮闘による負傷もあり、長吉に討たれた。

4—7
四角に囲まれた人名は大塚権太夫と武市善兵衛であるが、具足の描かれ方などは前段と符号せず、他本との比較から、小さく記された津田藤三郎と兼松正吉の一騎打ち(決着つかず)を描いたものでよさそうだ。
藤三郎と、正吉との一騎打ちは太田牛一の『内府公軍記』にも記され当初からこの戦いの有名なエピソードだった。

4—8
浮田中納言秀家は岐阜中納言秀信の誤り。『関ヶ原軍記大全』によれば、河田での敗戦を伝えたのは佐々弥三郎。秀信は自ら救援に出向こうとしたが、津田藤三郎がおしとどめ、秀信は岐阜城に退いた。

4—9
『関ヶ原軍記大全』では、藤三郎は岐阜城攻防戦でも大奮闘した。
『関ヶ原軍記大全』によれば、福島家臣・吉村又右衛門が、岐阜城の一番乗りで、櫓の窓から指物を出した。しかし、ここで窓から出されているのは傘で、これは『岐阜落城軍記』の秀信が開城の合図に笠を振り上げたことをさすのだろう。その左、白黒段々の旗を細川越中守忠興とするのは誤り。細川家の旗は九曜星で、白黒段々は池田輝政である。

4—10
『関ヶ原軍記大全』では、大垣から岐阜城救援のため合渡に着陣したのは、浮田・石田・小西勢であるが、ここでは、石田三成と島津軍の旗が描かれている。実際には、島津義弘が着陣していたのは墨俣である。『武辺雑談』によれば、合渡に陣する西軍に対し、東軍は田中吉政の馬取り惣八に瀬踏みさせた。惣八は機転をきかせ、川が深く流れが速い真似をしながら、吉政にめくばせした。その行賞として、惣八は侍として取り立てられ、合渡三郎右衛門と名乗った。
黒田長政に仕えていた後藤又兵衛は。合渡川を前に評定する東軍の席で「川を討死の場ときはめられん事然るべし。しからずは男子にては候まじ」と大言したことが、『常山紀談』にある。

4—11
仙石秀久、本多忠政、牧野康成、森忠政、榊原康政の旗がみえる。
真田隠岐守信尹は上田城主・真田昌幸の弟で、この時家康に仕えていた。『関ヶ原軍記大全』によれば、上田城を攻めあぐんだ東軍の間で、内通を疑われた信尹は幸村と刺しちがえようと上田城にむかった。
このシーンを描いたものとすると、絵巻の前後関係が異なってくる。

4—12
染谷平は上田城の北にあり、ここに徳川秀忠本陣がおかれた。
上州沼田城は真田伊豆守の居城である。真田幸村(信繁)の兄・信之は正室が家康の家臣本多忠勝の娘であったため、父昌幸・弟幸村と袂をわかち東軍に与した。
忠勝の娘は下野国犬伏からの帰路、沼田城に立ち寄ろうとした昌幸の入城を断った。

4—13
『大垣藩地方雑記』によれば、有馬家臣・稲次右近が一番首を取った。『天元実記』では、右近は敵方横山右近に組み伏せられたが、家中のものが監物を引き倒し、右近に首をとらせたという。
この日、浮田秀家は飯尾太郎左衛門に感状を与えているが、甘利備前は未詳。『常山紀談』では、飯尾甚大夫が成合平左衛門を討ち取ったと記している。
岡の上に立つ本多忠勝。側に床机が描かれているのは、忠勝のためでなく、絵巻に描かれていない家康の存在を暗示している。だとすると、ここは岡山本陣で、その東南に中村一忠の陣があることと矛盾しない。その左は釘貫を幕紋に使った有馬豊氏陣だろう。

4—14
関ヶ原の西軍を北西からのぞんだもの。配置が明らかに異なるのは、松尾山の麓に陣をしいた脇坂安治と鍋島直茂、直茂は国もとにいて、その子勝茂は」『関ヶ原軍記大全』では南宮山に陣していた。

4—15
東軍諸将の配置は具体的な配陣を示したものではない。
桃配山の家康本陣は、金扇の馬印で暗示されている。
家康の四男・松平忠吉は関ヶ原で初陣を飾った。後方に描かれる井伊直政の娘婿にあたる。
松浦の注記は松井の誤りだろう。『台徳院殿御実紀』では、島津義弘が敵中突破をはかった際、忠吉は直政とともに追撃し、島津家臣松井三郎兵衛を討ち取った際、負傷した。

4—16
大谷吉隆は重度のハンセン氏病で輿にのって自軍を指揮した。すでに勝敗が決まり、家臣から自刃をすすめられた、もしくは、平塚為広が吉隆に使者を送り、和歌をそえて今生の別れを告げたシーン(『常山紀談』)だろう。
吉隆は自害し、その首を家臣に託した。その家臣は首を隠すように埋葬した後、藤堂仁右衛門に討ち取られてしまう。その家臣名を『関ヶ原軍記大全』では三浦喜太夫、『常山紀談』では岩佐五介、『平尾氏割記』では湯浅五助としている。なお、『関ヶ原軍記大全』等では、仁右衛門は吉隆の首が埋められていた場所を知っていたが、吉隆家臣との約束を守り、他言しなかったという。

4—17
この表記が正しいとしると、木曽路を急ぐ秀忠軍を描いたもの。
但し、その背後に続く据黒の白旗、十字の旗、九曜星の旗を関ヶ原合戦シーンの加藤貞泰、加藤嘉明、細川忠興をさすものであれば、敗走する西軍の追撃シーンとも解せそうである。

館蔵品図録　戦国合戦図屏風
編集発行　岐阜市歴史博物館
岐阜市大宮町二丁目一八番地一
電話　058(265)0010
発行　平成二十年三月発行
印刷　株式会社 弘文社